特集１　大切ないのち・暮らしを守るために

いわきの医療

101万5千人

この数字は、令和４年に市内の病院（診療所除く）に外来で訪れた方の延べ人数です。

医師・看護師などが昼夜を問わず尽力し、医療を必要とする多くの人たちに対し、献身的な治療や看護が行われ、日々その大切な命を懸命につないでいます。

しかしながら、本市のみならず、多くの地方都市では、医師不足という深刻な課題を抱えています。

本市では、こうした喫緊の課題に対し、市医師会や市病院協議会と連携して、地域医療全体が一丸となってその弱点を補っています。

さらに、将来に向けた取り組みも始まっています。市内中・高生や県立医科大学の学生を対象とした医療体験・セミナーの実施など、医療人材の育成に積極的に取り組んでいます。

目の前の患者さんに適切に向き合いながら次世代の医師の育成にも力を入れている、いわきの医療。

本特集では、こうしたいわきの医療の現状と将来に向けた取り組みについてお伝えします。

医療が前進

いわき市長　内田　広之

本市の救急搬送時間は、福島・郡山に比べ６分程度長く課題ですが、ここ３年でそれを２分程度短縮できました。もっと縮めたいです。

医師着任は、昨年度、市医療センターに救急科、眼科、麻酔科など、福島労災病院には整形外科に３名が着任。市内に脳神経外科、さらに今年度には整形外科、眼科の診療所も開設。産婦人科の充実にも努めています。

研修医は毎年約20名が市医療センターで研鑽しています。一昨年、市医療センターでドクターカーの運用を開始したほか、昨年には手術支援ロボット「ダビンチ」も導入。

いわきの医療が着実に前進しています。

健康と生命を守る

市医療センター院長　相澤　利武

医療を取り巻く環境は、感染症への対応や医師の働き方改革の適用が間近に迫るなど、大きな転換期を迎えています。

このような中、当センターが地域の中核病院として引き続き高度先進医療や救急医療等を提供していくためには、今後も地域の医療機関などの皆さまと手を取り合いながら、地域全体で患者さんを治療し、支えていくことが重要です。

当センターは、市民の皆さまの健康と生命を守る「最後の砦」として、さらなる進化を目指します。

Q. 少しでも早く救命する取り組みってあるの？

A. 重篤なケースに対応し、1秒でも早く救急救命活動ができるように、市医療センターで「ドクターカー」を導入しています。

ドクターカーとは？

医師が直接現場に急行することで、病院に搬送する前から治療できるように導入されたのがドクターカーです。

現場に到着した段階で初期治療が開始でき、また、搬送中に患者さんの状態を把握できるため、病院に着いた時には万全の準備体制で受け入れることができます。

市医療センターでは、令和４年10月から運用し、これまでに100件の出動がありました。（R5.12月時点）

Q. いわきの診療医って増えてるの？減ってるの？

A. 市医療センター、民間医療機関ともに、新たに医師が着任しています。

ここ数年で、市医療センターでは、救命救急センター・循環器内科・眼科・麻酔科で新たに医師が着任しました。さらに、市内診療所では、内科・脳神経外科・心療内科・整形外科・眼科・歯科が新たに開設されました。

いわきの医療に貢献したい

高坂脳外科クリニック　金子 庸生　医師

以前は茨城県の病院で勤務していましたが、いわき市の医療を充実させたいと考え、いわきでのクリニック開業を決意しました。

以前と比べ改善してきていますが、診療所と病院での患者さんの受け入れをもっとスムーズにしたいと考えています。地域内で患者さんの治療を完結させる、医療の地産地消じゃないですけれども、そういった面で少しでも一助になりたいですね。そして、患者さんが安心して暮らせるまちにしていきたいです。

Q. 最近耳にするDMAT（ディーマット）ってなに？

A. 大規模災害時に災害派遣医療チームとして、被災地で医療活動を支援するチームのことをいいます。

令和６年能登半島地震の被災地へ向けて、本市からは常磐病院４名および市医療センター５名のDMATが先遣隊としてそれぞれ出動し、自衛隊ヘリの患者搬送の支援などを行いました。(R6.1.15時点)

Q. いわきは心疾患が多いと聞いて不安です…

A. 地域特有の課題にも対応できるよう、市医療センターでは専門チームを組み、高性能の医療機器を用いて治療を行っています。

心疾患は心臓に起こる病気の総称で、本市は全国平均と比べて、心疾患による死亡率が高くなっています。右図で示したとおり、全国平均を100とした場合、特に男性は128.9という高い死亡率になっています。
（出典：H25～H29年人口動態保健所・市町村別統計）

ハートチームの結成

市医療センターでは、循環器内科と心臓血管外科を中心に、多職種が力を合わせて「ハートチーム」を結成。技術的な研鑽だけでなく、患者さんごとの適応判断力の向上や安全性の確保にも努めています。

高性能機器の導入

心血管X線撮影装置と手術台を備えたハイブリッド手術室。心臓カテーテル室で実施する血管内治療と、手術室での開胸手術を同時に行うことができ、より安全に行えるとともに、各機器を組み合わせることにより、高度な心血管治療に対応しています。

メタボリックシンドロームや食事での塩分の取り過ぎは、高血圧の原因となります。高血圧が進むと心疾患のリスクが高まりますので、まずは日頃の生活習慣を見直してみましょう。

Q. いわきの医療の現状を詳しく知るには？

A. 市医療センターが年３回発行する「みまや通信」をはじめ、各種媒体で最新情報を発信しています。

いわきの医療 Instagram　いわきの医療 ホームページ　市医療センター 広報誌

未来へつなぐ

次世代の医師を育成

医師不足に加え、医師の高齢化が進む中、若い医師をいわきから育てるための取り組みとして、令和４年４月から県立磐城高校に「医学コース」が新設されました。
市や医療機関と連携した体験実習などを通して、医師としての人間性を醸成し、医学部進学に特化した学習・進路指導の充実を図っています。

医学との出会いと深めた意志

昨年12月に県立磐城高校医学コース1年生向けに行われた縫合体験会。第一線で活躍する外科医の先生から、手術で必要となる縫合の仕方などの指導を受けました。生徒は初めて使う医療器具に戸惑いながらも次第に慣れていき、その表情からは医師という職業への意識が芽生えていました。
体験会を主催した澤野医師（常磐病院）は「外科を志す医師が減っているので、ぜひ、ここから外科に進む人が出てくれると嬉しいです。そして、いわきの地域医療に貢献してほしいですね」と今後への期待を語ってくれました。
1月に同校医学コース2年生向けに行われた常磐病院での見学会と市医療センターでの外科手術体験セミナー。生徒は電気メスを使った切開や縫合、腹腔鏡の体験、手術支援ロボット「ダビンチ」を使ったシミュレーションなどを、医師から直接指導してもらいながら体験しました。体験を終えた生徒は「医師になりたいという思いがより一層強まった」と頼もしく語ってくれました。

「つなぐ」をつなげる

日々つながれている「いのち」は、さまざまな医療従事者の強い使命感によって成り立っていることに気付かされます。
医療という分野において、このいわきが「学び・研鑽」のフィールドとして貢献し、未来の医療人をつないでいく。
医師不足に対する特効薬はなくとも、未来を見据えた「ひとづくり」をいわきの地域医療全体で取り組んでいきます。